大極門について

大極門は、第一次大極殿院の南面に開く正門です。儀式の際には、天皇が出御することもありました。
間口22.1m、奥行8.8m、高さ約20mと、朱雀門よりやや小さい建造です。すべての垂木の先端に木口金具が施されています。木口金具は重要な建造物だけに施される装飾で、朱雀門よりも多くの部材に金具を備え、第一次大極殿に準じる格をもっています。
この門が当時なんと呼ばれていたか。その門号（門の名称）に関する記事は文献資料にはみえません。そこで、日本や中国の宮殿等の事例研究から「大極門」と命名し、扁額に揮毫しました。

■建物概要

工　　期：平成29年(2017)11月
　　～令和4年(2022)3月
構造形式：木造、五間三戸二重門、入母屋造
建築面積：449.81㎡
延べ面積：195.68㎡
最高の高さ：地盤面より鴟尾頂部まで約20m
軒の高さ：基壇面より約14m

■主な仕上げ

基　　壇：流紋岩質溶結凝灰岩(黄竜山石)
礎　　石：自然石花崗岩
塗　　装：丹土・胡粉・緑青塗
　　壁　：漆喰塗仕上げ
屋　　根：本瓦葺
錺 金 具：銅、青銅、金メッキ、金箔押し

東楼について

東楼は、第一次大極殿院の南正面、大極門の東側に建つ建物です（西側の西楼は今後整備予定）。平城京へ遷都された当初には、東楼と西楼はなく、730年ごろに築地回廊の一部を改築して2つの楼閣が増築され、大極殿院の正面に荘厳さが加わり、儀式の場としての偉容が整えられました。
外周柱（礎石建ち1本、掘立柱15本）は平城宮跡の復原建物では最大級（直径約75cm、高さ約12m）となっており、主に奈良・和歌山・三重の紀伊山系の推定樹齢200～300年ほどのヒノキを使用しました。

■建物概要

工　　期：令和4年(2022)3月
　　～令和8年(2026)3月
構造形式：木造二階建、桁行5間、梁行3間、
　　寄棟造、本瓦葺
建築面積：東　　楼 361.03㎡
　　築地回廊 263.66㎡
延べ面積：東　　楼 525.71㎡
最高の高さ：東楼地盤面より鴟尾まで約18m
　　築地回廊地盤面より棟上端まで約7m
軒の高さ：東楼地盤面より芽負外下角まで約12.5m

■主な仕上げ

基　　壇：流紋岩質溶結凝灰岩(黄竜山石)
礎　　石：自然石花崗岩
塗　　装：丹土・胡粉・緑青・黄土塗
　　壁　：漆喰塗仕上げ
屋　　根：本瓦葺
錺 金 具：銅、青銅、金メッキ、金箔押し

利用案内

【開館時間】 9:00～17:00（入館は16:30まで）

【休 館 日】 2月・4月・7月・11月の第2月曜日（祝日の場合は翌日）
　　年末年始
【入 館 料】 無料

館内での飲食、および喫煙、携帯電話による通話はご遠慮ください。

アクセス

●大和西大寺駅南口から 徒歩20分
●新大宮駅から徒歩20分
●奈良交通路線バスにて（時刻・運賃は奈良交通バスなびwebをご確認ください）
・近鉄大和西大寺駅南口から「朱雀門ひろば前」停留所まで約6分
・近鉄奈良駅から「朱雀門ひろば前」停留所まで約16分
・JR奈良駅西口から「朱雀門ひろば前」停留所まで約10分

バスなびweb

復原事業情報館

大極門・東楼を含む第一次大極殿院復原整備事業の様々な情報がご覧いただけます。大極門・東楼から徒歩約2分。

【開館時間】 9:00～17:00（入館は16:30まで）
【休 館 日】 2月・4月・7月・11月の第2月曜日（祝日の場合は翌日）
　　年末年始
【入 館 料】 無料

お問い合わせ

平城宮跡管理センター
住 所：〒630-8012 奈良県奈良市二条大路南三丁目5番1号
URL：https://www.heijo-park.jp
TEL：0742-36-8780

ホームページ

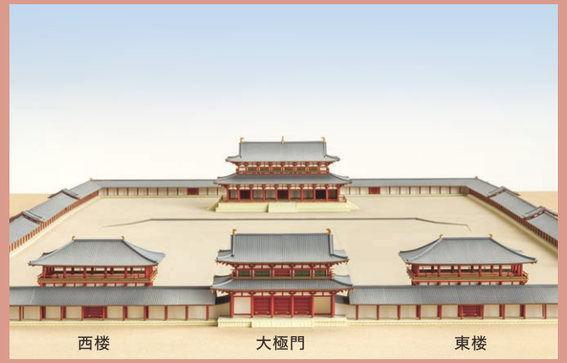
第一次大極殿院復原事業に関するお問い合わせ
国営飛鳥歴史公園事務所平城分室
TEL：0742-36-4327

2026年3月発行

第一次大極殿院
大極門・東楼

国土交通省 Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism
平城宮跡歴史公園 Nara Palace Site Historical Park

第一次大極殿院とは



第一次大極殿院は、平城宮における重要な国家儀礼の場です。東西約180m、南北約320mの南北に長い区画を築地回廊で囲みます。第一次大極殿の周囲は一段高く、その前面に磚積擁壁があります。内部の広場は南下がりの地形で、拳大の礫で舗装しています。今回の復原は、道路等の関係で復原できない後殿と北面回廊を除く、大極門、東西楼、築地回廊が対象で、回廊内の地形についても整備を進める予定です。

主な保存整備の経緯

明治～大正初期	関野貞が「平城京及び大内裏考」を発表 棚田嘉十郎、溝辺文四郎らが保存会を結成し、 土地の買い上げを実施
1922（大正11）年	史蹟名勝天然紀念物保存法に基づく史蹟指定
1952（昭和27）年	文化財保護法に基づく特別史跡指定 ※令和2年度末 約131haを指定済み
1998（平成10）年	文化庁による朱雀門、東院庭園の復原が完成 「古都奈良の文化財」の構成資産の1つとして、 ユネスコの世界遺産に登録
2010（平成22）年	文化庁による第一次大極殿の復原が完成
2018（平成30）年	3月24日 国営平城宮跡歴史公園開園
2022（令和　4）年	3月19日 第一次大極殿院大極門完成
2026（令和　8）年	3月14日 第一次大極殿院東楼完成

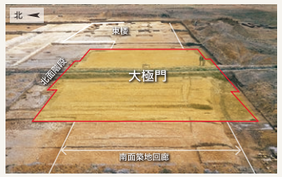
大極門（南門）の復原研究

□発掘調査

発掘調査は、奈良文化財研究所が昭和48年（1973）、平成17年（2005）、平成29年（2017年）に行いました。

柱の位置は確認できませんでしたが、建物下の基壇（基礎）の地盤改良と、基壇の側面を覆う石材（基壇外装）や階段の痕跡、屋根から落ちる雨水を受ける溝（雨落溝）を検出しました。これらの手がかりから、基壇と階段の大きさが判明しました。

発掘調査

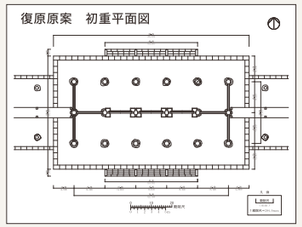


ほぼ基壇全体を発見した昭和48年の発掘調査

□柱の位置の復原

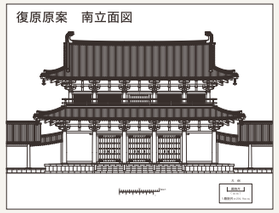
発掘調査で得られた手がかりは、基壇と階段の大きさ、および雨落溝でした。大極門の基壇は、間口に対して奥行の割合が比較的大きいのが特徴です。

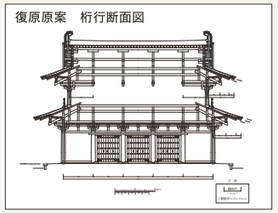
これらの情報をもとに、文献資料や絵画資料、発掘類例、現存する古建築の分析等を加え、屋根の形や深さ（軒の出）、柱上の組物などの建造物の上部構造を一体的に検証し、柱の位置を復原しました。



□門のかたち

文献資料等から、興福寺南大門は奈良時代前半から屋根が上下二層にかかる「二重門」だった可能性が高く、また古代の二重門はすべて桁行5間以上であったことが判明しています。さらに絵画資料では、二重門のほとんどが入母屋造に描かれています。その他の事例研究の結果、時代性、規模などを鑑みて、大極門は二重門・入母屋造で復原されました。





【伝統技能継承】

大極門と東楼の復原は、古代建築の伝統技能を継承する様々な分野の多数の工匠の技・経験・知識によって支えられています。

伝統技能継承 木の工匠

木材の選定から原寸図・型板作成、手斧や槍鉋等による加工、仕上げ、組立まで、伝統建築技法で造営されました。

伝統技能継承 石の工匠

柱の礎石は滋賀県で産出した花崗岩、基壇外装は兵庫県宝殿産の凝灰岩である「黄竜山石」を使用。切出し、加工、設置まで慎重に行われました。

伝統技能継承 塗の工匠

建物の塗装には、赤茶色の丹土、緑色の緑青、白色の胡粉等の顔料を用いました。顔料と膠を現場で調合する伝統的な塗装技法が使われています。

伝統技能継承 壁の工匠

左官は、壁や床を土や漆喰などを、鏝等の道具を使って塗上げる工匠です。下塗りから最後の漆喰塗りまで6工程の手間がかけられました。

伝統技能継承 瓦の工匠

瓦は、古代の瓦造りの技術を復原した上で、現代的な瓦造りの方法で1枚ずつ製作。伝統的で格式の高い「本瓦葺」で葺かれました。

伝統技能継承 鴟尾の工匠

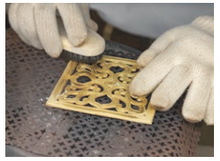
巨大な鴟尾は青銅で鋳造しました。鴟尾の文様には、出土瓦を参考に、大極門は唐草文・東楼は花雲文を採用して、両建物の造営の時期差を表現しています。

大極門の鴟尾

東楼の鴟尾

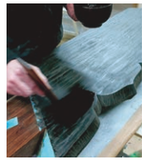
伝統技能継承 錺の工匠

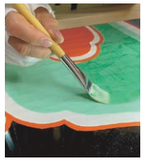
錺金具の大半は青銅製ですが、東楼の垂木先金具の一部は、出土金具の研究成果にもとづき、純銅を鋳造してアマルガム鍍金で仕上げる古代技法で復原しました。



伝統技能継承 扁額の工匠

大極門の扁額は、槍鉋で製作。文字周囲を薬研彫りとし、彩色も伝統的な天然顔料を用いた塗装です。周囲の額縁の形状は、基本的には大極殿と同じです。





東楼の復原研究

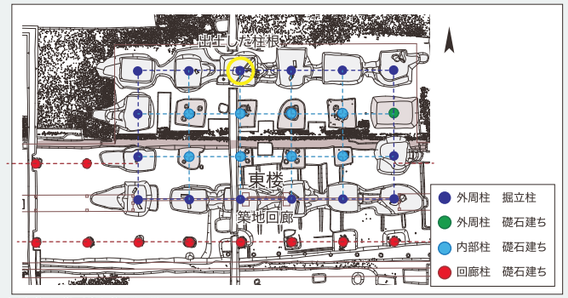
□発掘調査

発掘調査は、奈良文化財研究所が昭和48年(1973)に行いました。調査では、掘立柱を立てた巨大な穴の跡がみつかり、その1つから直径約75cm、長さ約280cmの柱根が出土しました。これは平城宮跡出土柱の中でも最大のものです。

発掘調査でみつかった平城宮最大の柱根

□特殊な構造

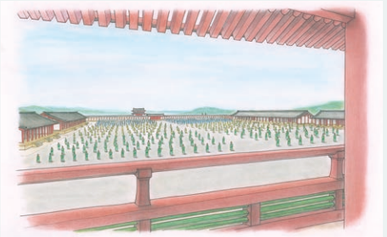
発掘調査で、外周に太い掘立柱を立てて屋根を支え、内部に礎石建ちの柱を立てて上層の床を支える、現存する古建築には例のない特殊な構造であることが判明しました。今回の復原では掘立柱と礎石建ちの柱の違いも再現しています。



掘立柱と礎石建ち柱の配置
奈良文化財研究所刊行の発掘調査報告書の図版に復原する柱の位置等を加筆しています。

□宴の場として

『続日本紀』天平8年(736)正月丁酉条に、聖武天皇が「南楼」において群臣に宴を催した記事があります。この南楼が東楼・西楼をさし、二階で天皇が主催する宴が行われた可能性があります。


東楼上層から中央区朝堂院をのぞむ
監修：奈良文化財研究所　描画：田中さとこ